

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03216

研究課題名（和文）神子柴系石器群の生成とその性格をめぐる研究

研究課題名（英文）A study of the emergence and characteristics of the Mikoshiha Complex

研究代表者

堤 隆（Tsutsumi, Takashi）

明治大学・研究・知財戦略機構（駿河台）・研究推進員

研究者番号：70593953

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：最終氷期末の日本列島に展開し、大形の局部磨製石斧と尖頭器をもつ神子柴系石器群の生成については、従来の学説である大陸起源説を支持せず、その分布密度からも日本列島内、とくに本州中央高地において出現したことが確認された。

神子柴系石器群の性格については、石器の単純な生活実用性のみならず、シンボル性や祭祀性も含意されていることを研究によって明らかにし、多様性をもつことを示した。また、道具そのものやその原材料資源の補給兵站のあり方が前段階から大きく変化したことも認識された。このことから旧石器時代から縄文時代へと移行する社会的交換システムの大きな変容が理解された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

移行期にある神子柴系石器群の成立を論じることで、旧石器時代から縄文時代への歴史や文化の変革が、大陸からの外来インパクトの是非を含め、どのような様態であったかを考古学的に明らかにすることができた。

また、そのような時代の変革期の石器群についての講演やシンポジウム、展示などのアウトリーチ活動から、社会変化・文化変化への市民の関心を高め、他方で重要文化財ともなっている神子柴遺跡出土石器ほか当該石器群の文化財保護の啓発にも寄与したものと考えられる。

研究成果の概要（英文）： This study implies that the Mikoshiha Complex characterized by the set of large edge-ground axes and bifacial points was emerged in the Japanese Archipelago at the end of Last Glacial, in particular in the region of Central Highland of Honshu, because sites attributable to the Mikoshiha Complex were mostly distributed in the Japanese Archipelago and dense in the Central Highland.

The study also elucidates that the Mikoshiha complex not only consists of simple and practical stone tools, but also delivers symbolic and ritual expression. Moreover, stone tool components and patterns of their supplying and logistics were changed from the cultural period prior to the emergence of the Mikoshiha Complex. These implications make us comprehend the dramatic change of social exchange system at the transition from the Paleolithic to Jomon.

研究分野：考古学

キーワード：神子柴系石器群 旧石器 - 縄文移行期 神子柴論争 生成と起源 石器群の性格 神子柴型石斧 神子柴型尖頭器

1. 研究開始当初の背景

最終氷期末、旧石器から縄文時代移行期に位置付けられる神子柴系石器群は、大型尖頭器と局部磨製石斧を象徴的に含む個性の強い石器群である。しかしこの石器群は、「神子柴論争」とも言いうる議論を考古学界に巻き起こしてきた。それは単独の争点ではなく「時代論」「機能論」「起源論」「性格論」の四者から構成される（堤 2013、堤編 2020）。

時代論は、これらを旧石器とするか縄文時代とするかという歴史認識の問題であるが、議論は縄文の暁を告げる石器群としての位置付けに落ち着きそうである。問題は他の三者で、「起源論」はこれらが大陸からの渡来石器かどうかという議論で、「機能論」は実用品か儀礼品か使用か未使用かという問題である。また、完成品ばかりが遺跡に残されるという当該石器群特有の出土状態から、遺跡がどのような役割を担っていたかを問うのが「性格論」である。

本研究は、三つの議論の論点を再整理し、調査・分析によって一定の解決の方向性を示すことを目指した。

2. 研究の目的

(1) 本研究の第一の目的は、対象となる神子柴系石器群が、大陸からの伝播によって成立した典型的な「渡来石器」と考えられてきた研究史的経過を踏まえつつ、「渡來說」および列島内の「自生説」を徹底検証し、その生成について考究することにある。

(2) 本研究の第二の目的は、神子柴系石器群の石器機能の解明にある。石器そのものが、使われたのか、使われていないのか。実用品か儀礼具か、石器が生産-利用-廃棄までどのようなライフサイクルをたどっているのか、について検証したい。

(3) 本研究の第三の目的は、神子柴系石器群の性格の解明である。神子柴系石器群が残された場、すなわち遺跡は、住居なのか、製品をストックするデポなのか、製品の交換の場か、墓か、祭祀行為の場なのか、どのような行為を伴って形成されたのか場なのかの論証を試みる。

3. 研究の方法

(1) 本研究の基底をなすのは、考古学的方法となる。その考古学的方法のうち、以下に細分される方法論的アプローチに基づいて研究を進めた。

(2) 分布論および年代論による検討：神子柴系石器群生成に関して、その分布的粗密、年代的傾斜をもとにその起源および生成プロセスを論じた。

(3) 石器の使用痕研究およびライフサイクル研究：使用痕研究により石器の使用・未使用問題、ライフサイクル研究によってその使用プロセスを論じた。

(4) フィールドワーク：神子柴遺跡の隣接地点の発掘調査の実施および石器石材原産地の踏査。

(5) シンポジウムおよび論文、研究誌を通じた争点の議論。

(6) 普及講演会、石器展示を通じた研究のアウトリーチ。

4. 研究成果

神子柴系石器群の生成とその性格をめぐる本研究においては、以下の諸点を明らかにすることができた。その成果と、今後の課題および展望について列記する。

(1) その生成については、神子柴系石器群の分布および年代的検討を通じ、その分布密度が本州中央高地に色濃く、さらに整った製品が多い、年代も起源地とされてきたシベリアより日本列島のものが古いことから、渡來說は成立せず、日本列島内、とくに本州中央部にあることが認識された（堤 2022）。

(2) 神子柴遺跡の両面調整体を取り上げ、そのライフサイクルについて考察した。使用/未使用が問題となる当該石器だが、使用痕分析によりあきらかに使用されたものがあることを証明

し、一方で運搬痕跡により長距離を持ち運ばれ、先々で使用されたモバイルツールであることを明らかにした（堤隆 2018）

（3）神子柴遺跡にまとめて残された黒曜石塊を分析した結果、熱破碎を受けていることが判明、それは実利的なものではなく祭祀行為による破壊と推定された。その様相もふまえ、神子柴遺跡の性格としては、居住地のみならず、資材のデポ、祭祀の場など、単一の機能を想定するのが困難で、複雑性をもって解釈することが重要と結論づけられた（堤 2023）。

（4）神子柴遺跡の性格解明のために隣接地点の発掘調査を実施した。結果、同一石器群は隣接地点では確認されず、神子柴の石器群が一か所だけに集中して残されたことが理解された。また、神子柴の石器群を包含するローム層序を確認し、堆積環境などを知ることができた。

（5）5 回のシンポジウムを企画し、神子柴系石器群そのものの存在事由と、それをういた狩猟採集民の生態を論じた。第 1 回（2017 年度）「シンポジウム神子柴系石器群とは何か」では研究課題が洗い出され（堤編 2018a）第 2 回（2018 年度）「シンポジウム神子柴系石器群：その存在と影響」ではその存在性が議論され（堤編 2018b）、第 3 回（2019 年度）「シンポジウム Hunting 狩猟相解明のためのアプローチ」では同時代の生業「狩猟活動」に焦点をあてた（堤編 2019）、第 4 回（2022 年度）「シンポジウム ” 検証：サピエンス日本列島への道 ”」では幅広く人類と石器群の拡散問題を扱い（堤編 2019）、第 5 回（2022 年度）は「シンポジウム神子柴系石器群の生成とその性格をめぐって」と題し総括研究集会を開催した（いずれも全国遺跡報告総覧でタイトル検索しダウンロード可能）。また、『季刊考古学』153 号（雄山閣）において 2020 年に特集「神子柴系石器群とは何か？」を組み、さまざまな研究者の意見を掲載し、広くその問題点と研究成果を開示した（堤編 2020）。

（6）海外における研究成果発表としては、北海道大学医学部の中沢祐一と共著で Quaternary International 誌（国際第四紀学連合刊）に、最終氷期における出現期土器の様相に関する論文（英文）を発表した（Nakazawa, Naganuma and Tsutsumi 2021）。また、ロシア科学アカデミーノボシビルスク支部の A. タバレフらとの共著で Stratum plus 誌（ロシア）に、日本列島における縄文草創期の自然・技術・社会の様相について論文（露文）を発表した（Gladyshev, Tabarev, Tsutsumi 2021）。

（7）2017 年度のシンポジウムに合わせ神子柴遺跡の石器と双壁をなす唐沢 B 遺跡の石器（長野県宝）の展示を浅間縄文ミュージアムにおいて 2018 年 2 月から 1 か月間行った。期間中には、研究者のみならず一般市民も多数見学され、通算約 1400 名の目に触れ、普及効果もあった。その後、神子柴遺跡出土の石器群（国重要文化財）を展示している伊那市創造館において、2018 年度および 2022 年度のシンポジウムで実施した普及講演会の際にも、多数の研究者および一般に講演参加のみならず実物の見学をいただき、普及啓発効果があった。

（8）最後に今後の課題と展望について述べる。まず、課題については、神子柴系石器群のデータベース構築とその公開がある。より詳細な属性を拾ったデータベースは現在作成途中であるが、データを精査したうえで早期に公開したい。一方、展望についてであるが、大陸の同時期石器群との比較研究を進め、最終氷期末の環境変動期に諸地域においてどのような石器群が生み出され、どのような地域社会が形成されていったかという広い視座での人類史を語ることを肝要と考える。

- 堤 隆 2022 「北方系細石刃石器群の流入と神子柴系石器群生成の問題」『シンポジウム ”検証：サピエンス日本列島への道 ”』 pp.58-61 明治大学黒耀石研究センター
- 堤 隆 2023 「神子柴における黒曜岩破碎行為とは 何であったか」 『何が歴史を動かしたか?』 pp.135-146 春成秀爾編 雄山閣
- 堤 隆編 2018a 『シンポジウム神子柴系石器群とは何か』 八ヶ岳旧石器研究グループ 56P
- 堤 隆編 2018b 『シンポジウム神子柴系石器群：その存在と影響』 八ヶ岳旧石器研究グループ 50P
- 堤 隆編 2019 『シンポジウム Hunting：狩猟相解明へのアプローチ』 八ヶ岳旧石器研究グループ 42P
- 堤 隆編 2020 『季刊考古学 特集：神子柴系石器群とは何か』 153 134P 雄山閣
- 堤 隆編 2022 『シンポジウム ”検証：サピエンス日本列島への道 ”』 明治大学黒耀石研究センター 66P
- S.Gladyshev, A.Tabarev, T.Tsutsumi 2021 The World of Incipient Jomon, Japanese Archipelago: Nature, Technologies, Society, and Continental Neighbors *Stratum plus* 1 pp.337-357 (露文)
- Yuichi Nakazawa, Masaki Naganuma, Takashi Tsutsumi 2021 The emergence and transmission of early pottery in the Late-Glacial Japan *Quaternary International* 608-609 pp.1-12 (英文)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計22件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 堤 隆	4. 巻 -
2. 論文標題 検証：北海道ルート 北方系細石刃石器群の流入と神子柴系石器群生成の問題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シンポジウム 検証：サビエンス日本列島への道	6. 最初と最後の頁 58-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆・中沢祐一	4. 巻 -
2. 論文標題 神子柴遺跡における破碎黒曜石の来歴	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シンポジウム 検証：サビエンス日本列島への道	6. 最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆	4. 巻 1
2. 論文標題 神子柴における黒曜石熱破碎とは何であったか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 何が歴史を動かしたか	6. 最初と最後の頁 135-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆	4. 巻 120
2. 論文標題 八風山遺跡群：最古の石槍アトリエ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佐久の考古遺産	6. 最初と最後の頁 9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆	4. 巻 120
2. 論文標題 中ッ原遺跡群：北方系細石刃石器群と希有な遺跡間接合	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佐久の考古遺産	6. 最初と最後の頁 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆	4. 巻 120
2. 論文標題 佐久の旧石器時代	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佐久の考古遺産	6. 最初と最後の頁 7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆	4. 巻 32
2. 論文標題 神子柴遺跡と石小屋洞穴	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊考古学別冊	6. 最初と最後の頁 55-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆	4. 巻 1
2. 論文標題 神子柴論争	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 旧石器研究への視座	6. 最初と最後の頁 18-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆	4. 巻 153
2. 論文標題 神子柴ディスコード	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 14-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆	4. 巻 153
2. 論文標題 痕跡研究と機能論的アプローチ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 47-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 . . ; . . ; .	4. 巻 1
2. 論文標題 , , , :	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 337-357
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 堤 隆	4. 巻 1
2. 論文標題 信濃川流域の細石刃集団の行動領域と生業のコントラスト	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 千曲川 - 信濃川流域の先史文化	6. 最初と最後の頁 161-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yuichi Nakazaw, Masaki Naganum, Takashi Tsutsumi	4. 巻 3
2. 論文標題 The emergence and transmission of early pottery in the Late-Glacial Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Quaternary International	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 堤 隆 御堂島正	4. 巻 15
2. 論文標題 石器痕跡分析の有効性 -ブランドテストによる検証-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 旧石器研究	6. 最初と最後の頁 69-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆 池谷信之	4. 巻 15
2. 論文標題 矢出川遺跡の細石刃石器群	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 旧石器研究	6. 最初と最後の頁 155-161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆	4. 巻 10
2. 論文標題 千早原遺跡の有茎尖頭器	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 資源環境と人類	6. 最初と最後の頁 55-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆	4. 巻 2
2. 論文標題 神子柴遺跡とその石器群	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神子柴系石器群：その存在と影響	6. 最初と最後の頁 45-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆・舟木太郎・池山史華・相川壤・大野李奈・片岡生悟	4. 巻 9
2. 論文標題 神津島における黒曜石原産地と菊若遺跡の石器	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 資源環境と人類	6. 最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆	4. 巻 8
2. 論文標題 ある両面調整体をめぐるエピソード	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 資源環境と人類	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 堤 隆	4. 巻 19
2. 論文標題 信州黒曜石原産地の資源開発と供給をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 島根県古代文化研究論集	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 堤 隆
2. 発表標題 検証：北海道ルート 北方系細石刃石器群の流入と神子柴系石器群生成の問題
3. 学会等名 シンポジウム 検証：サピエンス日本列島への道
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堤 隆・中沢祐一
2. 発表標題 神子柴遺跡における破碎黒曜石の来歴
3. 学会等名 シンポジウム 検証：サピエンス日本列島への道
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堤 隆
2. 発表標題 黒曜石熱破碎にみる神子柴の行為論
3. 学会等名 シンポジウム 神子柴系石器群の生成とその性格をめぐって
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 堤 隆
2. 発表標題 土器の登場と縄文時代のはじまり
3. 学会等名 十日町市博物館（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堤 隆
2. 発表標題 佐久の旧石器時代
3. 学会等名 佐久考古学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堤 隆
2. 発表標題 湧別技法の在地的変容
3. 学会等名 明治大学黒耀石研究センター シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 堤 隆
2. 発表標題 相模野台地の細石刃石器群
3. 学会等名 相模原市博物館ほか（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堤 隆
2. 発表標題 日本列島を最初に訪れた人々：旧石器研究の課題と展望
3. 学会等名 明治大学横断研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堤 隆
2. 発表標題 東日本の神子柴系石器群
3. 学会等名 考古学フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 堤 隆
2. 発表標題 野辺山高原における後期旧石器時代の 緑色チャート利用
3. 学会等名 日本旧石器学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堤 隆
2. 発表標題 最古の航海者と神津島産黒曜石資源の利用
3. 学会等名 神津島村教育委員会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堤 隆
2. 発表標題 神子柴遺跡をめぐる 4 つの謎
3. 学会等名 尖石縄文考古館（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堤 隆
2. 発表標題 黒曜石が語る列島の細石器文化
3. 学会等名 長野県立歴史館（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堤 隆
2. 発表標題 バイフェイスを携えて
3. 学会等名 長野県旧石器文化研究交流会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堤 隆
2. 発表標題 長野県佐久市志賀川上流域に分布する「駒込頁岩」とその利用状況について
3. 学会等名 長野県旧石器文化研究交流会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 堤 隆編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 120
3. 書名 季刊考古学 特集：神子柴系石器群とは何か	

1. 著者名 堤 隆 編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 八ヶ岳旧石器研究グループ ほか	5. 総ページ数 50
3. 書名 神子柴系石器群：その存在と影響	

1. 著者名 堤 隆 編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 浅間縄文ミュージアム	5. 総ページ数 72
3. 書名 異形の造形：釣手土器と有孔鐔付土器	

1. 著者名 堤 隆、小野昭、橋詰潤、池山史華	4. 発行年 2018年
2. 出版社 長野県南牧村教育委員会	5. 総ページ数 24
3. 書名 氷河期からのたより - 野辺山高原に生きた旧石器のハンターたち	

1. 著者名 春成秀爾編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 312
3. 書名 何が歴史を動かしたか	

1. 著者名 新潟県津南町教育委員会編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ほおずき書籍	5. 総ページ数 291
3. 書名 千曲川-信濃川流域の先史文化	

1. 著者名 堤 隆編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明治大学黒耀石研究センター	5. 総ページ数 66
3. 書名 シンポジウム 検証：サビエンス日本列島への道	

1. 著者名 堤 隆編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 八ヶ岳旧石器研究グループ ほか	5. 総ページ数 42
3. 書名 シンポジウムHunting：狩猟相解明へのアプローチ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------